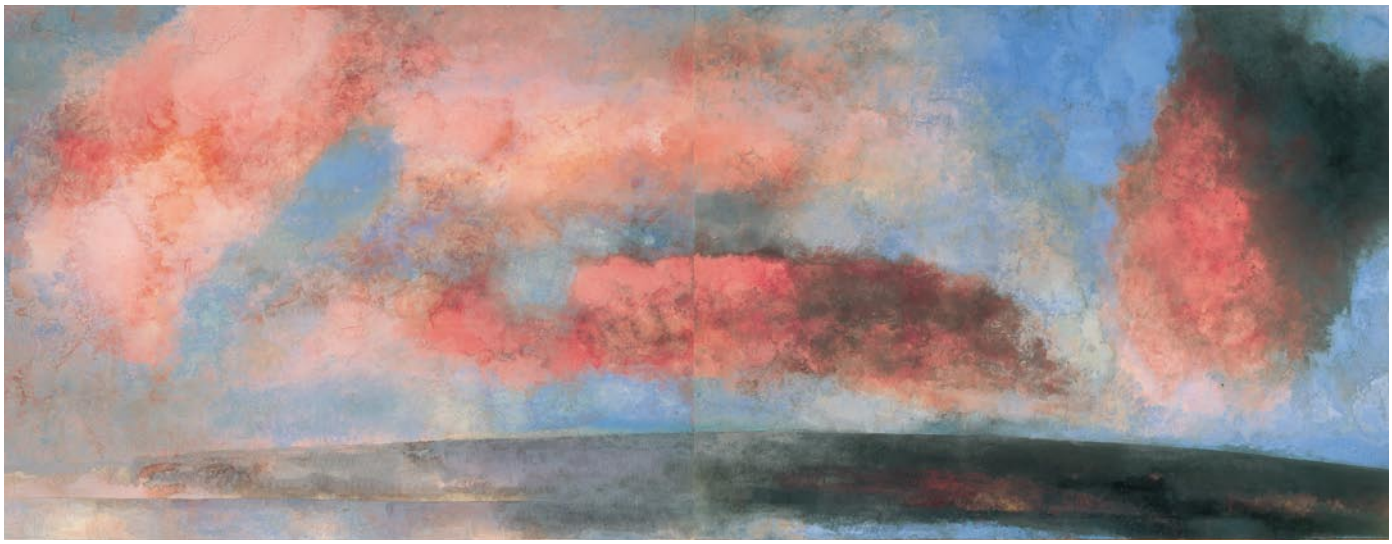
なごや文化情報

2014
1・2
January/ February

No.354
NAGOYA
Cultural
Information

随想／倉知可英（現代舞踊家）　視点／劇場発の育成事業
この人と／野々山享（セントラル愛知交響楽団副理事長）



公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2014
1・2
January/ February

Contents

名古屋市民文芸祭　受賞作品…… 2
随想　一期一会・・・　倉知可英（現代舞踊家）…… 3
視点　手作り感こそ武器に―「劇場発の育成事業」… 4
この人と・・・
野々山享（セントラル愛知交響楽団副理事長）…… 6
ピックアップ…… 10
おしらせ…… 11

「なごや文化情報」編集委員
倉知外子（オクダ モダン ダンスクラスター副代表）
酒井晶代（愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授）
田中由紀子（美術批評／ライター）
はせひろいち（劇作家･演出家）
米田真理（朝日大学経営学部准教授）
渡邉 康（椙山女学園大学教育学部准教授）

表紙

作品
「紅雲譜」
（1996年／紙本 岩絵具着色／ 165×430cm）
雲はなにか孤独なようでいて豊かさに満ちています。形や色を変えられても己を失なわず雲は雲。私の宗教のようなものなのです。刻々と変幻する雲の色にこそ、色の命というものを教えられるのです。

土屋 禮一（つちや れいいち）
１９４６年　岐阜県養老町に生まれる
１９６８年　武蔵野美術大学卒業
２００５年　日展文部科学大臣賞
２００６年　日本芸術院賞
現　　在　日本芸術院会員　金沢美術工芸大学名誉教授

「二〇二一年　名古屋市民文芸祭」
（第六三回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
詩の部 市会議長賞受賞作品
※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市会議長賞◆

名古屋市立扇台中学校三年
林　風花

星　空

記憶というのは　夜空に光る星のようだ
忘れたい記憶も
忘れたくない記憶も
一つ一つが　キラキラ光る　星なんだ

大切な星の光が強くなり
他の星々と手をつなぐ

手をつなぐことで星座になって
思い出として夜空に光る

夜空に広がる　私の思い出

この星座が　一つ一つの星達が
今の私を作る　確かな切片

随想

一期一会

くらち　かえ
倉知 可英（現代舞踊家）

'98年、愛知県の助成でフランスのグルノーブル国立振付センターで研修後、カンパニーメンバーとして在籍する。
'06年帰国後、オクダモダンダンスクラスターで指導し、振付家・ダンサーとして活動。
平成24年度名古屋市芸術奨励賞受賞。

戦後間もなく、名古屋で現代舞踊（モダンダンス）の研究所を開設した奥田敏子は、私の大叔母にあたる。

幼少の頃は、大叔母の稽古場の上に住んでいたので、稽古場のドアを細く開けて、稽古風景を覗いていた記憶がある。そして、海外から来た舞踊団公演などの一流の舞台に小さな私を連れて行ってくれた記憶も鮮明に残っている。

そして、6歳より大叔母の稽古を受け始めたが、3年後に大叔母は他界してしまった。大叔母と私の関係はたった9年足らずのものであったが、結果的に私の人生に大きな影響を与えたのは彼女である。大叔母が舞踊家でなければ、私は舞踊の道に進んでいたかどうか定かではない。この「出会い」から始まり、その後舞踊家としての道を歩んでいく中、数々の壁にぶつかるが、多くの素晴らしい「出会い」によって乗り越えることができた。現在も素敵な「出会い」は続いている。

そして、最近思うのは、音楽、演劇、舞踊などは、「瞬間芸術」だと言われるが、その場にいる観客は、まさにその瞬間との「出会い」の場にいるのだ、ということだ。

「時間」や「空間」を共有している観客と演者。観客は何を感じ、どんな気持ちで劇場を後にするのか、と考えると「いい出会い」をした、と感じてもらえるような作品を輩出していかなければならない、と思う。

日本では、特に現代舞踊の観客のほぼ3分の2は親族、友人、知人などの身内が多いと思うが、私が8年間踊っていたフランスでは、それぞれの地域の住民が観客なので、自分の知る人は誰もいない。だが、翌日街を歩けば、道ですれ違う人やカフェのギャルソンが「昨日の舞台を観た」と声をかけてくれ、色々と感想を話してくれる。私たちは観客の顔を知らなくても、彼等にとっては、私たちは舞台で出会った人間なのだ。何度も観に来てくれる人でも、その時間に繰り広げられるものは、その時にしか出会えないものだと言えば、いつも新しい出会いを求めて、舞台を観に来る人もいるだろう。

「一期一会」とはよく言うが、江戸幕府の大老でもあり、茶人でもあった井伊直弼が、「何度も同じ人と茶会で同席することがあるとしても、この茶会は一生にその日ただ一度のこと。二度と同じ時に戻ることはできないのだから、心を尽くしてもてなさなければならない」と述べたのが始まりだそうだ。

まさに、私もそんな思いで一つ一つの舞台に臨んでいきたいと思う今日この頃である。

Report 視点

手作り感こそ武器に──「劇場発の育成事業」

名古屋市芸術創造センターが「主体的な芸術育成事業」に乗り出して、2年目になる。昨年度は「バレエアカデミー」を開講し、年度末に発表公演を行い高い評価を得た。今年はジャンルが変わり「演劇アカデミー」が去る10月2日に開講。2014年3月1～2日に行われる発表公演に向け、公募のオーディションで選ばれた35人の受講生が劇場に通い、ワークショップに汗を流している。会館主導の新しい育成のカタチを探るべく、その2年目の中間報告として、稽古風景を取材してみた。（まとめ／はせ ひろいち）

「バレエ」と「演劇」を隔年で

関係者からは親しみをこめて「芸創」と呼ばれる同センターが1983年のオープンから30年の時を経て「初めての試み」として立ち上げたのが今回のアカデミー企画。昨年度の「バレエ」と今年度の「演劇」は今後も毎年交互に継続する構想であり、息の長い芸術支援事業にしていきたいという。

昨年のバレエアカデミーも同じように公募、オーディションを経て、最終的には40人の踊り手が大舞台を経験した。指導者としては、いずれも名古屋市芸術奨励賞を受賞した大寺資二、小川典子、後藤千花、徳山博士の4氏が指導・振付を担当した。事前にしっかりミーティングの時間を設け、役割を分担しあい本番まで精力的に作り上げた。普段ならなかなか同席できない4氏に横のつながりを作るのも主催者側のもう一つの狙い、願いだったに違いない。

募集の段階から「6年以上のレッスン経験を持つ25歳以下のダンサー」という条件がつけられていたのは、まさにダンスというジャンルの特徴だろう。演劇の今年は、特に応募の条件は設定していない。「結果的にはあまり大きなダンスカンパニーではなく、いわゆる中小の教室、スタジオから集まってくれた人たちが多かったですね」とは昨年の企画担当者の言葉。発表会は3部構成で、いずれもオリジナル振付のもと、40人の参加ダンサーは、1曲目と2曲目のいずれかに出演し、3曲目は全員で踊った。つまり参加者全員が3部中2部に出演したわけで、やりがい的にも充実したプログラムだったと思われる。

筆者は勉強不足で詳しくないが、ダンスの場合、教室やスタジオが積極的に他の団体と交流するコト自体が稀だという。参加者は所属団体以外のプロによる振付や指導を体感することになり、貴重で大きな刺激になったことだろう。そして、4人の講師陣もまた、講師間の触れ合いも含め、貴重な創造空間だったのではないかと想像する。「去年も芸創地下のリハーサル室がメインの稽古スペースだったのですが、鏡前のバーが足りず、急遽増設しました。これも40人のダンサーが一堂に集まる空間に実際に付き合って、初めて知った問題点。普通に管理しているだけでは、その不自由さが実感できませんからね」と先述の担当者。会館が主体的に稽古場に付き合う姿勢は、表現者と管理者の距離を確実に縮め、今後の企画運営にも、大きなプラスノウハウになっていくだろう。企画側の歩み寄りや柔軟さが、表現者側を力強く後押しする。そしてこの環境こそが、ジャンルを超えた共通の財産なのだ。

12歳から83歳までの座組み

さて、そんな昨年の情報を予備知識として、今回の取材場所であるリハーサル室にきてみると、ずいぶん様相が違う。端的に言えば「高齢者が目立つ」わけだ。オーディションで選ばれた今年の参加者は12歳から83歳までの35人。男性14人、女性21人が各世代に分散しているものの、50代以上の参加者が半分以上を占めているのも特筆すべき事実だ。この日の担当講師だった麻創けい子さんは「私も最初は驚きましたが、今では『全然あり』って感じですね。自分の何十年間をちゃんと生きてこられた人ばかり。舞台に自分の居場所を求める欲があって、みな張り切ってます」との言葉。演劇の場合、時にその人の生き様がそのまま「存在力」として大きな武器になる。躍動感ある若い表現と競演してもひけをとらず、時には凌駕もする。そして、こうした世代を超えた時空自体が、若い役者にも貴重な体験になるのだろう。

今年の講師陣は先出の麻創さんのほかに、川村ミチルさんと丸知亜矢さんの3人。奇しくも女性ばかりとなった。全28回の練習日のうち、初めの8回までを基礎講座として行い、前半3回を主に「カラダ」に関して丸知さんが担当、

熱心に指導する麻創さん（左）と川村さん

その後、麻創さんが「台詞」を中心にワークショップを行い、川村さんにバトンタッチする。川村さんは上演台本の作・演出はもちろん、メイン講師として、いよいよ公演に向けての残り全稽古を取り仕切ることになる。「オーディションも含め3人でじっくり話し合い、分担と方向性を決めました」と川村さん。

脚本、演出を担当する川村ミチルさん

「5ヶ月間」を有効に使って…

取材に訪れたこの日は、基礎講座の７回目にあたり、麻創講師の最後のレッスン。麻創さんは稽古用にご自身の代表作である「昨日、戦ガアリマシテ」の部分を使って、群集シーンを精力的に作り上げていく。若者の出征を見送る場面では、遠い戦争のニュアンスに遠慮がちな若手に対し、我々こそが、とお年寄りたちの元気がいい。きっと麻創講師が今回のキャスト層を見て選ばれたテキストであり、その思惑が見事に功を奏している。そして、麻創さんの隣では、メイン講師の川村さんが、じっくりと稽古を見学、役者たちの一挙手一頭足に鋭い視線を送っている。「いよいよ次回から私のターンが始まるんですが、今までも出来る限り顔を出すようにしてきました。実はまだ台本を最後まで書いていないんです。35人の皆さんをこうして何度も見ることで、それぞれの感性や得意技をうまく出せるような構成にしたい」と川村さん。

例えば市民参加でオリジナル作品を作ろうとしたとき、全員にじっくり書き下ろしたい意識とは逆に、人数が多ければ多いほど稽古のスケジュールがタイトになり、どこかで妥協をせざるをえない経験は、筆者にも少なくない。本番の前に丸５ヶ月、28回の稽古が組めて、かつ基礎講座の８回の間に、作家がじっくり表現者の特性を観察できるというのは、なかなかうらやましい環境なのかもしれない。これが毎回のリハーサル室確保も含め、実際の劇場がプロデュースすることの「得意技」だとしたら、この企画が今年も成功する大きな要素だと言えるだろう。

エチュードの群集シーンに汗を流す参加者

宮沢賢治の世界を多角的に

「オーディションでの審査ポイントは、やる気と協調性。決してテクニックではなく、みなで何かを創れるイメージが持てている人は落とさなかった」と川村さん。結果、予定の定員より５人多くの仲間が出来上がった。「私は一緒にやっていくうちにどんどんその役者が好きになっていくタイプ。その上でその人の魅力が舞台で出るよう演出するんです。この座組みも最初は平均年齢の高さに戸惑いもありましたが、今では皆さんの存在感にただただ敬服している感じですね」と目を輝かせる。

『すきとおった風と光と』と題された書下ろし作品は宮沢賢治の世界をモチーフに、多角的、重層的に場面を構成していくという。「広い舞台なので抽象性を生かしながら、大好きな『雪わたり』や『ゴーシュ』のシーンも盛り込みたい。これも今までの交流でわかったんですが、実は楽器演奏が出来たり合唱経験があったりする人もいらっしゃるので、ぜひそれぞれの特技が出せるような柔軟なホンにしたいですね。授業のシーンや楽隊の場面など、出演者がどんどんイメージを与えてくれる」と川村さん。年明けからは稽古の頻度も増え、この座組みでしか出来ない、貴重な空間が立ち上がっていく。まさに「手作りアカデミー」の醍醐味といったところだろう。

現場の近さと稽古日程の優位性

若いメンバーが横のつながりを大切にし、技とセンスを高めあって成功した昨年の「バレエアカデミー」。そして今年の「演劇アカデミー」は、世代を超えた役者陣の生き様を舞台に乗っけるべく柔軟な指導方針が貫かれる。ジャンルによりアプローチは異なるが、劇場主体の企画の２つのメリット、すなわち担当者が常に稽古場に付き合い現場のニーズに即応する体制と、募集開始から10ヶ月以上もかける余裕を持ったスケジュールを見失わない以上、次年度からの継続にも、大きな意義が見出せるのではないだろうか。何よりまずは３月に行われる演劇アカデミー発表会の成果に期待したい。

各世代が共存する空間

公演案内

名古屋市芸術創造センター演劇アカデミー発表会
「すきとおった風と光と」

日　　時／3月1日(土)19:00・2日(日)15:00
会　　場／芸術創造センター
料　　金／前売 1,800円・当日 2,000円(全自由席)＊1月上旬発売予定
問い合わせ／芸術創造センター TEL 052-931-1811

この人と…

セントラル愛知交響楽団副理事長

野々山 享（ののやま すすむ）さん

名古屋音楽界の立て役者

名古屋フィルハーモニー交響楽団、ナゴヤシティ管弦楽団、セントラル愛知交響楽団、名古屋少年少女合唱団など、高度成長時代からの名古屋の音楽界をリードする団体の創設と育成に大きな役割を果たしてきた野々山享さん。50年に渡って名古屋音楽界を支え続けた軌跡を伺った。（聞き手:渡邉 康）

広告業界から中学教員へ

野々山氏ははじめから音楽界に身を置いたわけではない。師範学校出身の母親の影響から自分も教員を目指し、岐阜大学に進んだ。国語教員の資格を取ると同時に、後の学校活動に役立つと思い演劇活動にも打ち込んだ。そこでの活動は卒業後も続き、中学教員時代には大いに役立ったし、この演劇活動は後に数々のグループを推進する大きな力となる。

演劇の仲間と（後列右から2番目が野々山氏）

大学卒業時には教員の道ではなく、コピーライターを志望した。ラジオからテレビの時代になりつつある時で、これからは広告を制作するコピーライターが必要になると思ったからだった。「大学時代は替え歌とかね、ちょっとしたヘッドコピーとかサブタイトルを作るのが得意だったんですよ。それでコピーライターがいいなって思って」。アイディアマンだったのである。この豊かな発想がその後の音楽界での拡がりに活かされる。

そこで高校時代の先生に相談したところ、「寧ろ鶏口となるも牛後となることなかれ」との言葉をもらった。大きな組織の一員となるよりも、小さな組織のトップとなって力をふるう方がやりがいがあるという意味である。それで大広告会社の電通ではなく名古屋に本社がある三晃社に入社する。「はじめ 1 年営業に配属されて、コピーを書くにしても三行広告ばかりでつまらなかった。映画の予定記事を埋めたりキャバレーの募集広告とかね」。これはいつまでたってもコピーライターにはなれないと判断して、間もなく退社する。

次に、中学教員になった。教員時代の最後に赴任した鳴海中学（今の緑高校の場所にあった）で名古屋フィルハーモニー交響楽団立ち上げ時の初代指揮者となる清田健一氏と同僚となるのである。そのころ CK（NHK 名古屋）オーケ

ストラの指揮や作曲をしていた清田氏とは屋台での飲み仲間。「鳴海駅前の屋台でよく飲みましたよ、先生でも仕事が終わってから飲んで何が悪いって感じでね」。

昭和 34 年の伊勢湾台風の時にはちょうど宿直。山の上の木造の校舎や体育館は大きく揺れ、瓦は飛び、窓は破れて職員室の先生の机の上の答案は散乱する始末で大変だった。体育館に逃げ込みマットを積んでその陰に避難したが、スレートの屋根が破れて暴風雨が吹き込んで、もうひどかった。「3日後に結婚式を控えていて女房の顔は浮かぶし、こりゃ結婚できんなと思いましたよ。宿直日誌はいつも異常なしって事だけど、この時は異常あり、だった」。

そんな思い出のある鳴海中学時代は、まさに高度成長期の始まりで、その時代の象徴ともいえるマンモス公団住宅の鳴子団地ができたばかりである。そこから多くの生徒が通い 1000 人を超える規模だった。「旧東海道宿場町に住む生徒と、公団住宅から来る生徒は感じが違うんですよ」。新興住宅地と旧市街地、それは当時の都市部の典型的な風景であった。

同僚だった清田氏が音楽活動が多忙となり教員を辞めることになった。「清田健一がやめると、ちょっと寂しいなと思った」。しかしそれは大きな一歩への始まりだったのだ。

学芸会にて主役の生徒と

カワイ楽器へ入社

自らも教員を辞めてある日新聞をみていたらカワイ楽器の「セールスマネージャー募集」の広告を発見。これからは楽器産業が盛んになるだろうと思って、入社試験を受けることに。会場の公会堂に行くと 50 人以上の受験者がおり、クレペリン検査などの試験があった。「それで 4 人が合格したんですよ。そして浜松の本社に熱田から国鉄に乗って幹部候補生として講習を受けに行ったのは忘れもしないことです」。当時のカワイ楽器は本社を中心としての直営店方式を展開中で「ブラザー方式」の戸別訪問、月賦販売を推進しようとしていた。浜松で下宿して朝5時起き、マラソン、契約の仕方や販売の方法、幹部になるための心得などを厳しく訓練されたのである。

名古屋支店に配属された最初の仕事は、多治見営業所の開設だった。

それは毎日中央線の蒸気機関車にのって開設の場所を探すことから始まった。不動産の物件探しである。現地で事務所を開設して 3 人のセールスマンを雇うというのが目標だった。うまく不動産屋の場所をそのまま借り受けることができて、カワイ楽器多治見営業所の看板を掲げるのに成功した。中津川から春日井あたりまでの広い範囲が営業エリアだった。

当時の多治見にはまだ電気がない場所があった。電気を使うオルガンを販売することができない地区があった時代である。足踏み式のオルガンしか売れない。入学式の日にはデモンストレーションをやろうとしてリヤカーに足踏み式のオルガンを乗せることを考えついたりもした。恥ずかしがる販売員を説得して街頭宣伝をしたのである。

初めてのピアノ販売

「所長！ピアノが売れました！」。多治見の美容院の娘がピアノを買ってくれることになった。この一大事に野々山氏は一策講じた。

ピアノを検品に行くのにわざわざタクシーを手配してその車の後部にカワイ楽器の旗を立て、動く広告宣伝にして名古屋支店に乗り付けたのである。それは三晃社時代の経験を活かしたものだった。新聞社や放送局、広告会社が車に会社の旗を掲げて走ることがある時代だったのだ。これが名古屋支社の幹部の目にとまり名古屋支店の販売促進課長に抜擢された。そしてさらに学校に楽器を納入する学販部長に栄転。小、中学校は入札で楽器納入が決定されるが、高校や特に大学では日々の営業が大切である。そこで中部7県にそれぞれ学販の拠点を置き統括することになる。富山大学、福井大学、金沢大学の先生との関係が深まった。このことも中部の音楽界をもり立てる上での大きな人脈作りに役立ったという。

カワイ楽器名古屋 新ビルにて

名古屋少年少女合唱団の設立

その頃、名古屋支社のビルが手狭になり隣の大きなビルに移ることとなる。そして元のビルにカワイ楽器の貸しホールができたのだが、稼働率は低かった。当時のカワイ楽器はハードには強いがソフトに弱く、ソフト部門の充実を図るということで少年少女合唱団をつくることが検討された。愛知教育大学の水谷俊二先生が CBC でどんぐり音楽会に出演していたのでそこに相談し、名古屋少年少女合唱団の立ち上げが決定した。多くの子どもが集まりオーディションを受け入団した。「子どもが集まれば楽譜も売れるしオルガンもピアノも売れるだろうということで昭和 41 年に発足させました」「ホール代はタダにするけど、月謝袋の裏にはカワイのマークを入れてね」。今も活躍するこの合唱団の設立はこうしてカワイ楽器のホールからスタートしたのだった。

名古屋少年少女合唱団　南京演奏旅行

名古屋フィルハーモニー交響楽団の設立

時をほぼ同じくして、名古屋のカワイ楽器の縁で、東京フィルハーモニー交響楽団のヴァイオリン奏者松木章伍氏が来名することになった。柳橋の朝日文化センターの音楽教室はカワイ楽器が運営していたが、そのヴァイオリン教師として派遣されたのである。しかし松木氏は教えることよりもオーケストラで演奏することを望んだので、その時名古屋には存在しなかったオーケストラを設立する事を考えついた。中学教員時代の同僚清田健一氏に相談した。「オケを作るのだけど協力するかと言ったら、ちょうどCKのオーケストラも無くなったからやると言うし、カワイ楽器だけでは運営が無理だから名古屋テレビの高橋さんや朝日新聞の兼松さんの協力も得ることができた。よし、やるぞ！となった」。

そして CK オーケストラの旧メンバーや南山大学、金城学院大学、名古屋大学、名古屋工業大学卒業のオーケストラ経験者を集めて、名古屋フィルハーモニー交響楽団が昭和 41 年にスタートした。はじめは音楽教育公演で多治見の学校を回ったり、東海学園で演奏したりした。「出来高払いだから、その日にいただいたギャラを団員に渡すといったこととした」。なお、昭和 21 年にまた別の組織として名古屋フィルハーモニー交響楽団があり、朝比奈隆氏が指揮をしたがこれは現在の名フィルとは流れが違う。

そして昭和 42 年 10 月に愛知文化講堂で第 1 回定期演奏会開催。オール・モーツァルトプログラムで清田健一氏の指揮。50 人のメンバーであった。N 響、京響のメンバーで一部補強していた。このようにして名フィルの設立に陰の立役者として活躍したのである。設立から7年間カワイのホールが名フィルの練習場であった。

さらにその頃、私立音楽大学の設立が相次いだ。名古屋自由学院短大（現在の名古屋芸術大学の前身）、岐阜の聖徳学園短大、大垣女子短大の音楽科の教員集めに協力した。これらはカワイ楽器の学販部長としての職務でもあったのだが、少年少女合唱団、名フィル、音大の設立にその経験をフルに活かしての事になったのである。

パリ公演

昭和 62 年、名フィル出向前年には名フィルのパリ公演の準備と実現に関わってこれを成功させた。パリ在住のピアニスト中沖玲子氏の協力もあって、シラク首相から名古屋市長に名フィルを招待するという招聘状が届いたことから始まったのだが、このことによりマスコミの注目を浴び、名フィルのプロオケとしての評価は上がり、自覚と実力が増してより定着したのである。そのパリ公演の予算を集めるのに走り回り、名古屋市から約 3000 万、財団や銀行を回って合計 9000 万円を調達した苦労があった。当時の名フィルの理事長が東海銀行頭取の加藤氏になっていた。その理事長から「野々山さん！少しは金残してりゃーよ。何やるの。80 人で行くともったいないで 40 人にしやーよ」と名古屋弁で言われたのが懐かしい思い出だそうだ。しかし「自分は事務所でお留守番役だったよ。暇でこりゃいいやってかんじ」。向こうへの市長のお土産は浮世絵の版画だった。

名フィル　パリ公演

昭和 63 年 4 月、カワイ楽器から名フィル理事・事務局長として出向し、翌年専任となり楽団運営の中心を担うことになる。それは当時の中経連の田中理事長（名フィル理事長）から河合社長（中経連副理事長）への要請であった。専用の練習場がなく、しばらくジプシー生活が続き、名古屋テレビのホールを無理を言って借り、座席を取っ払って分厚いカーテンを掛け、楽器運搬用のリフトを付けてもらったりしていた。最初は名古屋市公会堂の上の階を練習場にと思ったが、下に音が漏れるので不可能だったそうである。そして平成 8 年、金山に現在の音楽プラザ（名フィルの専用的練習場・市民も使用可）ができるまでそれが続く。

名フィル設立25周年記念誌より
「鼎談名フィルについて語ろう」（司会:野々山氏）

ナゴヤシティ管弦楽団へ

一方でナゴヤシティ管弦楽団は昭和 58 年にクラリネットの瀬戸和夫氏を中心に十数名で発足していた。平成 4 年に愛知芸術文化センターができ、コンサートホールで演奏会を行うようになっていたが、楽員はやはり十数名、名フィルからのエキストラが多くて、演奏レベルは低く、そのアマチュアともプロとも言えないような中途半端な存在に「こりゃいかんわ！どうにかせんと」と思ったそうだ。

ナゴヤシティの運営委員長瀬戸和夫氏は名フィルにもエキストラでよく出演していて、野々山氏とウマが合っていた。平成 5 年の秋頃、瀬戸氏からナゴヤシティの事務局長就任の要請をうけ、翌年事務局長に就任。決算書を見ると毎月大幅の赤字で今月も 300 万円足らないとか 500 万円足らないといった状況だった。瀬戸氏と野々山氏とで自費を持ち寄って補填したというが、いつまでもそれは続かない。法人化を目指すこととなった。

ナゴヤシティ管弦楽団から セントラル愛知交響楽団へ改名

当初は芸文ホールでも行っていた定期演奏会をしらかわホールのみで行うことで、ホール使用料の減免を受け支出を減らし、年 5 回の定期演奏会を行うことでプロオケとしての条件を整え、賛助会員、定期会員制度を拡充した。しらかわホール定期会員として 300 名を目指し、最初は 100 名ほど集まった。現在は約 250 名である。プロオケとして認められるとアフィニス文化財団の助成を受けるようになり、日本オーケストラ連盟にも加入できた。

「名前を変えるのには苦労しましたね、みんな反対するしね」。岩倉市の援助で練習場を借りたり補助をうけていることや、名フィルと似ていたりして紛らわしいこともあり、名前を変えたかった。『横文字 3 千字』という本を買ってきてダーと見て研究したりもした。「山の名前と川の名前のは無いね、金鯱交響楽団も変だし、もう変なのばっかりなんで中心をとって独断でセントラルにしちゃったんですよ」。また、熱田区日比野に事務所があったが、オーケストラの事務所としては華やかさに欠けるから替えたかった。現在は名駅（（株）ダイドー所有ビル）に事務所を移している。

いよいよ主要メンバー数人の保証だけでは銀行が資金を貸してくれなくなって窮地に陥ったが、現在の安藤重良理事長と（株）ダイドーの山田貞夫社長（副理事長）の存在で維持することができた。日本経済が上向いた今も、セントラルの経済面はさらに苦しい状態であるという。「たいへんです」。口癖は「案ずるより産むが易し。されど育てるのは困難」である。

セントラル愛知交響楽団

これまでの広告代理店時代、教員時代、カワイ時代の経験が、名古屋少年少女合唱団、名フィル、セントラル愛知の運営で役に立った。80 歳を超える今まで休むことなく活動できた。「鶏口となるも牛後となることなかれ」の精神は一貫していたし、合唱団では数々の国際舞台で活動できた。困難に対しては「断じて行えば鬼神もこれを避く」の精神で切り開いてきた。

この不屈の精神が現在の名古屋音楽界の絆を守り続けたのである。野々山氏のお話をじっくり伺い、この大きな存在にただ感嘆し、感謝の気持ちを抱くばかりであった。

ピックアップ

やっとかめ文化祭「辻狂言」

「やっとかめ文化祭」（10月31日～11月24日）の一環「芸どころ　まちなか披露」として、市内各所で「辻狂言」が繰り広げられた。「路上で爆笑パフォーマンス」というサブタイトルのとおり、人通りの多い場所で狂言を上演するという趣向である。11月1日18時からの名古屋駅ナナちゃん人形前を皮切りに、名古屋パルコや大須商店街、オアシス21、サンシャインサカエなど15会場で、のべ20回の上演があった。

「辻狂言」という語は、江戸時代の「辻能」に拠っている。「辻」とは十字路のこと。幕府や藩の直属でない役者によって、市中の空き地や社寺の境内で演じられた能・狂言が、仮の舞台という意味で「辻能」と呼ばれたのである。まさに「まちなか」の芸能である。

ただ、現代の「まちなか」は、古い時代の「辻」とは違う。特に音。バスの発着音や、店舗から漏れてくるBGM、果てはビル側面にある映像広告の大音量まで。開演を知らせる司会の、マイクとスピーカーを通した声もかき消されてしまう。だいじょうぶだろうか？

だが、装束を身に付けた演者が現れると、意外に周囲の雑音は気にならなくなり、そこはまさしく狂言の世界と化していた。たまたま通りかかった人が興味を示して立ち止まり、狂言独特の声の調子、しぐさに引き込まれている。いちど見入ってしまうと、晩秋の冷たい風の中でも、その場を離れる人は少なかった。

ふと、「芸能が成立する四条件」というのを思い出した。特別な「よそおい（服装）」「ふるまい（動作）」「しつらい（設備・装置）」、そして、それらをつなぐ共通の理解「共同意志」である（日本文化史研究者の熊倉功夫氏による）。

辻狂言は、狂言の「よそおい」と「ふるまい」が出現した時点で、人々の前に特別な空間を作る。「しつらい」の点では、通常の能舞台でないうえに、今回の特設舞台はとりわけ狭いことが心配されたが、実際は何のその。何もない舞台が家の座敷や寺の門前、山路、市場へと自在に変化する、狂言の魅力が十分に伝わってきた。

さらに、最後の条件である「共同意志」を満たすうえで見逃せないのが、あらかじめホームページやチラシで会場と時間を調べ、訪れた狂言ファンの存在である。狂言は、古典芸能の中では比較的取っつきやすいとはいえ、通りかかりの人の多くは、やはり戸惑いを覚えるのではないだろうか。そこで先にいる観客の様子を見て、声を出して笑っていいとか、途中で拍手はしないとか、狂言の見方を察知する。じゃあ見ていこうかという気分になり、そこに「共同意志」が生まれるのだ。さもなければ、狂言にふさわしい雰囲気を保つことは難しいだろう。

狂言ファンにとっては、憧れの役者の技や声を、手を伸ばせば届くような距離で感じることができる。一方、通りかかりの人にとっては、突如古典芸能に出会ってしまう、ゲリラ的なストリートパフォーマンスとも思えただろう。

辻狂言は企画として、非常に冒険的な試みであったかもしれない。だが、その成果は、騒音の中でさえ周囲の空気をたちまちに変えてしまう、長い歴史に裏打ちされた狂言の底力を大いに実感できるものだった。　（Y）

11月22日　イオンモール名古屋みなと店にて

事業団設立30周年記念事業

Theatrical Music Grand Gala Concert

オペラ・オペレッタ・ミュージカルの名曲で綴る華麗なる大音楽会

時間旅行～音楽は時代を越えて～

名古屋市文化振興事業団は今年度設立30周年を迎え、事業団が1985年の「三文オペラ」を皮切りに毎年度上演してきたこの企画公演も今回で30作目を迎えます。そこで30年の集大成としてオペラ、オペレッタ、ミュージカルと続く舞台芸術の歴史を『フィガロの結婚』『メリー・ウィドウ』『マイ・フェア・レディ』『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』等の珠玉の名曲とともに辿るガラ・コンサートを地元で活躍する若手からベテランの出演者とセントラル愛知交響楽団の生演奏でお贈りします。（公演の詳細は裏面に掲載）

【構成・演出】

広渡　勲

（ひろわたり　いさお）

早稲田大学卒業後、東宝演劇部に所属。在籍中に菊田一夫の演出助手、舞台監督として「ラ・マンチャの男（日本初演）」「ファンタスティックス（日本初演）」等のミュージカル公演を手がける。その後、プロデューサー兼技術監督として、ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座や、パリ・オペラ座バレエ団等の世界の主要歌劇場・バレエ団、オーケストラの招聘、制作、舞台製作を総括。演出家としては、佐渡裕指揮の兵庫県立芸術文化センター喜歌劇「メリー・ウィドウ」（2008年）、喜歌劇「こうもり」（2011年）を担当し大成功を収める。2000年フランス共和国政府から「芸術文化勲章シュヴァリエ」叙勲。現在、昭和音楽大学客員教授。

＜GALA＞華麗なる30周年記念祝賀大音楽会

今から約400年前、ルネッサンス期からバロック期へ移行する頃、イタリアのフィレンツェで生まれた“オペラ”は、王侯貴族に愛され、その評判はヨーロッパ全土に広がりました。19世紀中頃になると、ダンスや娯楽的要素を加えた“オペレッタ”がパリで誕生、世紀末のウィーンで花開きます。この大衆的な音楽劇は移民たちとともに新天地アメリカへ渡り、世界各地の芸能や、黒人音楽やジャズを取り入れた独自の音楽劇“ミュージカル”というジャンルを確立します。そして1927年ミュージカル第1号という記念碑的作品「ショウ・ボート」が誕生します。

“オペラからミュージカルへ”これは大学で私が長年続けている授業のテーマです。

事業団30周年記念公演のお話をいただいた時、これまでの公演記録やパンフレットを拝見しながら、この祝祭的な公演として、直観的にこのテーマの舞台化を思いつきました。

GALAという公演タイトルは今では日常的によく見かけますが、日本で初めて使ったのは今から30年前の1983年。私が音楽プロデューサーとして現役で仕事をしていた頃です。フレーニ、ヤノヴィッツ、バルツァ、ボニソッリ、カップチルリ、ギャウロフという世界的な大歌手が一堂に会す“夢の饗宴”。本来“祝祭的な”という意味で欧米では使われていますが、当時の日本ではまだ珍しく、鶏ガラとか、客席ガラガラとか、散々マスメディアにいじられた苦い経験が思い出されます。

今回は、30周年を祝うガラ公演として、思い出の舞台や感動の名場面だけでなく、新たな旅立ちへ向かって、未だこの舞台で上演されていない名作名曲の数々をご覧いただきます。

廻る! 廻る! 舞台は廻る400年! 豪華で贅沢な七つ星音楽時間旅行号。発車準備完了です!

【音楽監督・指揮】

古谷 誠一

（こたに　せいいち）

東京大学文学部卒業。二期会中四国支部のモーツァルト「魔笛」公演で指揮デビュー。国内の主要オーケストラとの共演や、東宝ミュージカルや日本オペレッタ協会公演など活動の場を広げている。1997年にはカーネギーホールにてオペラ「日本の夜明け」（演奏会形式）を、また2003年には韓国初のオペラハウスにおいてオープニングフェスティバル「蝶々夫人」を指揮してともに大成功を収める。これまで8作の企画公演の指揮を手掛け、2007年のオペレッタ「伯爵令嬢マリッツァ」以来7年ぶりの登板となる。現在、名古屋芸術大学客員教授、セントラル愛知交響楽団正指揮者。

「マイ・フェア・レディ」の頃、そして今回

今回、事業団の30周年記念の舞台を一緒に創れるのは本当に嬉しいことです。

この企画に初めて参加したのは、第4回の「マイ・フェア・レディ」の時でした。その前年に、東宝ミュージカル（於：日生劇場）でこのミュージカルを指揮していたのが縁で呼ばれたのだと思いますが、事業団の充実した楽しい稽古と本番は、脳裏に焼きついて離れません。

歌、芝居、踊りという違うジャンルのメンバーが集まって、所属の団体の枠を越えて刺激し合い、そして一つの舞台を創るという喜びに溢れていた頃でした。中でも、イライザ役の加藤三貴子さんの名演・名唱は忘れられませんし、客席にいた財津一郎さんの「ブラボー!」の連呼も昨日のことのように思い出されます。

その後何度も事業団の舞台を一緒に創ってきて、抱腹絶倒の事あり、とても人に言えないような事あり、感動して涙する事あり、思い出すことは沢山ありますが、この数年、この企画の意義、意味合いをもう一度考える時期にさしかかっているなと感じさせられることが増えてきました。

今回、一本の出し物を何か決めて舞台を創るのではなく、ガラ・コンサートという形で一つの作品に仕上げるというのは、大変大きな決断だったと思いますが、広渡先生のストーリーは絢爛豪華なもので、必ずや最後まで楽しんでいただけるものになると確信しています。出演者もバラエティーに富んで実力派ぞろいですし、踊りも今までになく刺激的なものになるでしょうし、この先10年間に向けての何かが見つかるものと、大きな期待をしています。是非2月に、会場で。

【振付】

髙木 順子

（たかぎ　じゅんこ）

中京大学体育学部卒業。名倉加代子・岩下佳代にジャズダンスを師事。名倉加代子ジャズダンス公演「Can't stop Dancing」「八代亜紀劇場公演・全国ツアー」「メガロポリス音楽祭」「レコード大賞」「オール・トヨタファミリーミュージカル ONE」等に出演。自主公演「ON&OFF」、名古屋市文化振興事業団ミュージカル「オズの魔法使い」「シンデレラ」等の振付、「トーキー・トーキー」の振付助手。現在、名古屋芸術大学音楽学部非常勤講師。中日文化センター、サン・ワークスタジオ等で指導している。

「時間旅行」を楽しい旅に

今回、名古屋市文化振興事業団設立30周年記念事業に参加させていただける事をとても感謝しています。ただ、稽古や本番を楽しみにしつつも、スタッフ・キャストの皆さまを拝見させていただいた時、その大変豪華な顔ぶれに恐縮し、尻込みしてしまったのが本音です。

今回の公演は「時間旅行」というタイトルをからも分かるとおり、ワクワク!! ドキドキ!! 何が起こるのか? 期待感いっぱいです。しかし、振付を担当する私が考えなくてはならないのは、長い歴史のある舞台芸術の世界を短い時間、限られた空間の中で、どのように踊りで表現しようか? またキャストの方々の素敵な歌声をどうすればより素晴らしく演出できるか? 名作・名曲ばかりであるだけにそのイメージを崩さず、それでいて自分らしく…。

今回出演するダンサーは若手が多く、今後が期待される人材ばかりです。彼らとともに精一杯の努力をし、楽しい舞台を創り上げていきたいと思います。

劇場というタイムマシンに乗って、楽しい旅を過ごしていただけますように!

平成25年12月25日発行（隔月1回25日発行）通巻354号　編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団　〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP http://www.bunka758.or.jp/

Information

名古屋市文化振興事業団2014年企画公演

事業団設立30周年記念事業

Theatrical Music Grand Gala Concert

オペラ・オペレッタ・ミュージカルの名曲で綴る華麗なる大音楽会

時間旅行

～音楽は時代を越えて～

構成・演出／広渡　勲　　音楽監督・指揮／古谷誠一

振付／髙木順子　　管弦楽／セントラル愛知交響楽団

助　成／芸術文化振興基金

主　催／公益財団法人名古屋市文化振興事業団

日　時／2月21日（金）18:30
2月22日（土）11:00、16:00
2月23日（日）11:00、16:00

会　場／名古屋市青少年文化センター・アートピアホール［ナディアパーク11F］

料　金／S席4,500円、A席3,500円＜全指定席＞
※事業団友の会会員は1割引
（事業団チケットガイド及び事業団の管理する文化施設での前売りのみ）

「Theatrical Music Grand Gala Concert～時間旅行～」は、これまでオペラ、オペレッタ、ミュージカルなどを上演してきた名古屋市文化振興事業団の企画公演30回目を記念して、舞台芸術史に残る名作から選りすぐった名曲の数々をガラ・コンサート形式でお贈りする公演です。

今回は、オーケストラの生演奏や歌声のみならず、音楽を一層盛り上げるダンスシーンや舞台セット、コンサート進行にもストーリー性を持たせるなど独創性あふれる公演となっております。

舞台となるのは、今は廃墟となった古い劇場。そこに迷い込んだ一人の少年が、現代に甦った劇場支配人とともに劇場の歴史を辿る時間旅行に旅立ちます。そこで、繰り広げられるのは、『フィガロの結婚』『セヴィリアの理髪師』などのオペラの時代から『こうもり』『メリー・ウィドウ』などのオペレッタの世界、そして『ショウ・ボート』から始まり、『アニーよ銃をとれ』『マイ・フェア・レディ』『ラ・マンチャの男』『キャッツ』『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』など華やかなミュージカルの世界へと続きます。

これらの名曲を地元で活躍する若手からベテランの歌手とダンサーの実演でお贈りします。

＜出　演＞

井原義則、江端智哉、奥村育子、加藤恵利子、金澤澄華、鏑木勇樹、佐野文彦、塚本伸彦、夏目久子、日比野　景、水谷和樹、やまもとかよ、吉田裕貴

落合健史、山﨑未友季、岩川 均、斉藤諒馬

浅井　健、安藤芽久結、石黒崇真、伊藤沙緒里、伊藤駿佑、今岡一慧、URARA、上井雅子、太田めぐみ、大原 力、奥平祐介、小栗有賀、各務裕梨佳、加藤武志、加藤優一、菊地弘泰、岸 豊大、木村朱李、西塔理絵、佐々木大輔、杉浦愛美、早川とものり、平田了祐、松村有美、三島早稀、水谷彰宏、山田紘子、山田美波、山田幸保　　順不同

※キャスティングを都合により一部変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

■チケット取扱い
- ・名古屋市文化振興事業団チケットガイド　TEL 052−249−9387
  （平日9:00～17:00/チケット郵送可）
- ・名古屋市文化振興事業団が管理運営する文化施設窓口（東山荘を除く）
- ・チケットぴあ［Pコード:214−542］　TEL 0570−02−9999
- ・愛知芸術文化センタープレイガイド　TEL 052−972−0430

問い合わせ　名古屋市文化振興事業団チケットガイド
TEL 052-249-9387　FAX 052-249-9386

最高の瞬間を
鮮明な映像と音で
お届けします！
感動をハイビジョン・4K映像で表現
TVSnext
TVSnext 株式会社 ティーブイエスネクスト
旧：㈱東海ビデオシステム
〒460-0013 名古屋市中区上前津2丁目14番15号
TEL.052-322-6541 FAX.052-322-6638
http://www.tvs.co.jp

舞台映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。
ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

We make you move
舞台音響/映像設備 機器販売・設計・施工・保守・特注品製作
株式会社エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL 052-761-5400　FAX 052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。
ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,300円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布
公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL(052)735-3151　FAX(052)735-3152　E-mail：mpoffice@pa2.so-net.ne.jp
業務内容　①舞台の企画・制作マネージメント　②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング　④舞台・イベントの運営

デザイン・印刷／駒田印刷株式会社